

獨協大学60周年記念鼎談 伝統の継承と新たな価値創造への契機

獨協大学は今年創立60周年。「還暦」という節目を迎えるにあたり、「これまで積み重ねてきた伝統を継承しつつ、新たな価値を生む契機とし、獨協ブランドの再構築を目指します」という目標を掲げています。
そこで、獨協大学の「伝統」と、これからの歩みについて、学長・副学長にお話を伺います。



児嶋 一男 副学長

中央大学大学院博士後期課程文学研究科英文学専攻満期退学。83年獨協大学外国語学部専任講師、88年外国語学部助教授、96年外国語学部教授。本学における役職歴は、04～08年学友会総務部長、09～11年学生部長兼敬和館長、15～19年入試部長。20年4月1日より副学長に就任。

山路 朝彦 学長

東京外国語大学大学院修士課程外国語学専攻科ドイツ語専攻ドイツ語修了。86年獨協大学外国語学部専任講師、90年外国語学部助教授、01年外国語学部教授。本学における役職歴は、94～96年外国語学部教務主任、97～01年学長室委員、03～07年学生部長兼敬和館長、08～12年教務部長、12～19年副学長兼総合企画部長および獨協学園理事。20年4月1日より学長に就任。

岡垣 知子 副学長

ミシガン大学政治学部大学院修了。政治学博士。11年獨協大学法学部教授。本学における役職歴は、14～18年国際関係法学科長兼総合政策学科長。20年4月1日より副学長兼総合企画部長に就任。

●獨協大学の「伝統」とは

山路 獨協大学60周年記念事業の目標に、「積み重ねてきた伝統」という言葉があります。まずはこの節目に、改めてその「伝統」とは何なのかということについて考えていきたいと思えます。

岡垣 獨協大学の伝統を語るうえで、まず前身である、明治時代の獨逸学協会学校のころから受け継いできた教育精神を忘れてはならないと思えます。

山路 そうですね。世界から先進的な学問を学び、取り入れることで日本を前進させようとする、現代にも通じる精神がありました。

岡垣 はい。獨逸学協会学校は、日本の近代化に多大な貢献をした哲学者・啓蒙思想家の西周*が創設者の一人であり、現在の司法試験に当たる「判事検事登用試験」の受験資格を与えられた9つの学校のひとつでもあります。現在の獨協大学が持つ先進性の礎ともなった、誇るべき歴史、伝統だと思えます。

山路 法学や語学といった「実学」と先進性を重んじる精神、それらを受け継ぎ、「学問を通しての人間の形成」という教養の理念を組み合わせ、獨協大学を創設させたのが、天野貞祐先生だといえます。また、大学は学問を教授する場であると同時に、教える者と学ぶ者が一体となって「人間形成という営為」を行う「教育共同体」であるとも構想なさいました。

児嶋 その精神は、かつてのキャンパスの造り界の敷居を一つ越えた時に、視界がいきなり拓けるような醍醐味を一度は在学中に味わってほしいと思えます。



児嶋 私も同意見です。メッセージにすると、「勉強をしましょう」というありきたりな言葉になってしまいますが(笑)。しかし卒業後に振り返ると、この自由な4年間がどれだけ貴重だったかわかります。「あの4年であれができたのに、これができたのに」…そんな後悔をしないように、自分が好きなこと、熱意を注げることを、きっちり4年間頑張ってみてはいかがでしょうか。

山路 「人と自然と建物が調和する」この緑豊かな大学での4年間で、何かに粘り強く取り組み経験をしてほしいですね。学問に限らず、熱心に取り組めばどこかで「成長した」という実感を得られるはずです。スポーツでも、振り返ってみれば学びと成長が実感できるでしょう。それは達成の喜びにも、自信にもなるはずです。そういった経験は、社会に出てからの皆さんを支えてくれる財産になるはずです。

線の指示などにきちんと対応していただき、学内での感染対策のルールも守っていただきました。



●獨協大学の「これから」

児嶋 コロナ禍で社会が大きく変わって技術も進歩し、よりグローバルで、多様性にあふれる世の中になったと感じます。しかしその一方で、語学の今後に関していうと、今までのような語学は不要になるだろうと思っています。旅行での日常会話などは機械が翻訳してくれますから、「情報を伝達する」だけの外国語を教える意味は薄くなるでしょうね。

岡垣 語学は人の視野を大きく広げてくれますが、語学ができて当たり前前の時代にもなっています。また語学はツールですから、外国語を使って何をしたいのか、しっかりと目標を持つことも大事だと思います。

児嶋 同感です。これから求められるのは、言語の間、行間を読む能力でしょう。異なる文化圏の人びとと交流するためには、言葉の間で交わされるコミュニケーションを読み取る能力を、いかに育てていくかが課題になると

にも表れていました。建て替え前は先生方の研究室がみんな一階にあって学生との距離が近く、より密接に関われる環境でした。加えて学生が素直なも昔からの特徴で、教員と学生とが親しみを持って交流していました。その精神は今も生きる伝統です。

●任期を振り返って

山路 改めて任期の4年間を振り返ると、どうしてもコロナ禍との戦いの印象が一番強くなくなってしまっていますね。誰もいないキャンパスの光景というのは実に寂しいものでした。

児嶋 そうですね。学校に来て誰もいない、ゴーストタウンのような状況でしたから…。ようやく規制が緩和されて、学生が賑やかに話している声を聞くと、やはり大学はこうでなくてはと実感します。

山路 学校としての対応も本当に大変でした。大学に学生が入ることもできない中、それでも授業は続けなければならず…。先生方は本当に頑張ってくださいました。

岡垣 コロナ禍の初期は何度も会議を重ねて遠隔授業の準備を急ぎ、先生方のご理解を得て、早期に実施できるようになりました。児嶋 それは先生方や職員の方々の協力体制が組めたおかげです。かなりこまめに連絡を取り合い、顔を突き合わせて会議をしていました。その間に、誰も感染しなかったのは幸いですね。

山路 学生たちも在宅授業でよく耐えてくれました。規制が明けて学校に戻ってからも、コンピュータによる入構チェックや動

*西周(1829~1897年)現在の島根県津和野町出身。江戸時代末期にオランダで法学を学び、明治維新後はその内容を翻訳、整理した『万国公法』を出版した。また、「哲学」や「芸術」など、西洋からの概念を翻訳し、数多くの漢語を考案している。

※本文内敬称略